

北インド農村調査紀行

長谷山崇彦

まえがき

筆者は滞印中 The Delhi School of Economics (注1) の PHD コースに2年1カ月にわたり所属していたが、その間、付属研究機関である Agricultural Economics Research Centre (略称 AERC) (注2)、プーナの Gokhale Institute of Politics and Economics (注3) および各州政府の協力下にインド各州のサンプル農村に実態調査を行なう機会をえた。その中から南インドに2カ月半行なった農村調査中に体験したことをまとめた拙稿「南インド陸上紀行」が『アジア経済』第Ⅲ巻第2号に掲載されたが、この小稿に対して読者のかたがたから多くのご質問やご意見をたまわり、日本におけるインド農村に対する関心が非常に高まっていることを知り感激したしだいである。帰国後も今度は北インド農村の実状をしりたいという要望を下されたかたがたがあったので、ここにあって北インド農村調査の中の1つをえらび、その体験を稿とすることにした。本稿の題は農村紀行となっているが、今回は実態調査を通じて知った農村の実状の方に重点をおいている点、ご了承を乞いたい。

(注1) 『アジア経済』第Ⅲ巻第9号の「研究機関紹介」における拙稿を参照されたし。

(注2) 同上。

(注3) 『アジア経済』第Ⅲ巻第5号「研究機関紹介」参照。

U. P. 州の農村へ

わたくしの U. P., バンジャブ, マハラシュトラの各州を中心とする帰国前最後の北インド農村調査は1962年の冬期, 1月中旬に着手された。北インドの夏期は3月から7月のモンスーンをふくめて10月末までつづき, 5月～6月末の「死の季節」といわれる炎熱期には真夜中の最低気温33°C前後, 日中の最高気温は45°C以上で, 多くの人や動物がルウ・ラグナー(熱風で死ぬ)のすさまじさだが, 11月から2月までの冬期は昼夜間の寒暑の差は大きいがまずいわゆるベスト・シーズンである。調査前の1カ月間はデリー大学の AERC (農業経済調査センター) において対象村落の資料分析を行なう。北インドの農村には何回も入ってきたが今回は初めて調査に入

る村落が多いので現地ではそこにすみこんでいる AERC のスタッフ達の協力をうることにした。まず最初の調査対象村落モハマドプール・ガザマルプール (Mohammadpur Gazamalpur) のある U. P. 州西部のフィロザバード (Firozabad) にオールドデリー発の午後の列車で向う。携行品は例のごとく調査資料や若干の身のまわり品を入れたトランクにホールドール(インドで旅行に用いられる粗末な寝袋)にカメラだけの1人旅である。フィロザバードはタージ・マハルで有名なアグラを少しすぎたデリーよりは約220余キロのところにある小さい町である。ここはガラス製腕輪(ヒンディ語で churi という。インドの女性が装飾用に腕にはめるガラス製の腕輪)の産地として有名で, 今回の調査目的はこの町の腕輪産業が周囲の農村経済におよぼす影響を調査することである。汽車がアグラに入り, 広いジャムナ河の鉄橋をのろのろと渡りはじめると, 河をはさんで一方には赤褐色の砂岸で築かれた男性的雄姿を誇るアグラ城がそびえ, そのほのかなたの対岸には純白の大理石に輝くタージ・マハルが優美この上ない姿を浮び上らせている。いつみても静かな情趣と幽玄にみちたタージである。ムガル王朝の栄華, そしてシャージャハーン王と愛妃ムンタヅ・マハルの純愛は時代の変遷をよそにあのタージの大理石の中に幻想的響きにつつまれて今日までも変わらずにつづいてることを想うと異常な感動が熱く湧いてくるのを覚え



つねに殺人的酷暑を呈する普通3等車。炎熱期の車内はまさに悲惨な状態となる。農村調査ではこれよりひどい回車の並バスにもつめこまれる覚悟が必要である。

現地報告

る。これから入る農村のあまりにも苛酷な現実に比べるとなんとかかけはなれた夢幻的な美しさにあふれた姿であらうか。

ジャムナ河をこえてさらに半時間ほどすすむとフィロザバートにつく。乗降客のほとんどないひっそりとした小さい駅である。車室の堅固な重い扉をひき開けてホームの石の上に坐っていたクーリー（赤衣と赤ターバンをつけて駅の荷物運びを職とする人夫）をよぶと、「イヘ・カンプール・ナヒン・ハイ・サーハブ（ここはカンプールじゃないですよ。旦那）」という。わたくしがこの先の工業都市カンプールにいくと思ったらしい。こんな小さい町に一見外国人らしき人間が降りることなどないのだろう。「ハム・ヤハン・ヒイ・トウ・アーイエ・ヘン、バーイ。イヘ・ラーナー（ここにきたんだよ兄さん。これをたのむぜ）」と荷物をわたして駅前のリキシャ（Rikshaw. 人力車）がたむろしている所まで運ばせる。クーリーはインドの常として頭の上に重い荷物を器用にのせて、荷物をもちぬ時にはまづみられぬほどの速足で歩いていく。リキシャにとびのり目的地をつげ、殺風景な町を走り出す。この町の公共交通機関もこのリキシャとトンガ（Tanga. 馬車）だけである。肌寒い気候なのにボロをまとっただけだが北インドの流行歌「リキシャ・ワラー（人力車のおじさん）」を想わせるなかなか威勢のいい車夫である。どうも正体不明だが払いの悪くはなさそうなサーハブを久方ぶりにのせたので皮算用のサービスをしているらしい。威勢のいいのは結構だが、いつまでも目的地につかない。道に迷っているのである。命じられた行先をしらなくても、客を逃がさぬためにとにかく走り出し、まあ道々考えながら「ディーレ・ディーレ・チャレン！（ゆっくりいこうぜ）」というのはインドのリキシャ、トンガの常である。なにをきいても容易に「しらぬ」といわぬのがインド人、ことにセミ・インテリ族に共通の点だ。物をきかれて「しらぬ」ということやトラブルがあった際に「わたくしがまちがっていた」ということは当人にとっては失職をも意味する深刻なものになる可能性があるようで、「しらぬ、まちがった」といわぬのもイギリス統治時代にインド人が覚えた必死の自己保全手段とも思われる。

あまりいつまでも考えながら走られては困るから、わたくしが道をきいて教えてやりながら、どうにか目的地らしき方向に近づいていった。ヒンドスタニ語（ヒンディ語と若干のウルドゥ語の混合した言語）を必要最小限に解し、あとは度胸と忍耐力があればインド中どこに

いってもなんとかなる。インド人口の約90%は英語をまったくしらないが、ヒンドスタニ語は言語の異なる州や地方でもよほどの田舎に入らないかぎりじゅうぶん通用するし、また都市にいる一般の外国人が通常接しうる相手は上下をとわずまず必ずヒンドスタニ語をしているであろうから言語の異なることを心配する必要はない。

目的地、フィロザバード町のはずれにある小さい地方大学内の1室には調査のためにAERCから派遣されてすみこんでいるR・A・シング君がまっていた。インドのインテリにはめずらしく当たりのやわらかい明朗なラージプートの青年である。せまくておせじにもよいとはいえぬかれの部屋の中にわたくしのためにもう1つのインド式寝台を入れてくれ、下男といっしょに夕食の仕度にとりかかった。やがて「さあ、ファースト・クラスですよ。」とここにこしながら食物をインドで一般に使われる食器である鉄製のおぼんにもってすすめてくれる。麦作地帯の北インドの主食であるチャパティに卵とアルー（ジャガイモ）のカレー煮に井戸水だけで、美味、栄養価、清潔という、あらゆる望ましく必要な条件からはほど遠い夕食だが、食糧不足で多くの人口が飢饉に近い状態にある北インドの農村調査中にありつく食事としては文句もいえないし、なによりも上層カーストに属するかれが下男といっしょに料理することは階級制度の根強いインドの慣習からみれば大変なことで、すべてわたくしのためのサービスであり、この温い友情こそまさにファースト・クラスである。夕食後は疲れてはいたが、シング君やわたくしの来訪をたちまちに探知してやってきたこの町のボスやその友人達を混えてジンや地酒を飲みながら夜おそくまで語り合った。

腕輪を作る農村

翌朝、朝食もぬきにして調査対象のモハマドプール・ガズマルプール村へシング君と人力車ででかける。この



色とりどりのガラスの腕輪を請負業者が町の工場からもってくる

町から村までの途中の一角にはガラス製腕輪工場がいくつも並んでおり、規模も小から大までいろいろある。約2キロ走るとめざす村につく。

この村はいわゆるハリジャン村で U. P. 州の腕輪産業の中心地フィロザバードの各腕輪工場の下請け作業をしている村で人口は約380人。全村89世帯のうち、83戸までがこの下請け作業を主職や副職としており、そのうち43戸はこの下請け作業だけを唯一の生活手段としている。農耕もないわけではないが、農耕を唯一の生活手段としているものはわずか2世帯にすぎず、これを入れても農耕を行なっているものは28世帯にすぎない。要するに全世帯のうち60.7%が非農業である腕輪工場の下請け作業を主職としているのである。

本来この村は全世帯の約90%以上がジャータバ (Jatava 皮革業を主職として農業労働を副職にする低カーストで Chamar ともいう) で残余がカチヒス (Kachihis 野菜類を栽培する低カースト) でその伝統的なカースト職業に従事してきたのだが、増大する人口圧力により農地不足などが深刻化したこと、工場町に近く、下請けの賃金労働など非農業職がえられることなどにより、従来の伝統的なカースト職業や農耕はしだいにすたれて腕輪製造の下請け賃金労働という非農業職を主要な生活手段とする方向に発展したわけである。かくしてこの村の経済はしだいに町の経済と融合し、村の人口の賃金労働者化傾向が強くなり、村の農地も腕輪工場やその他の町の建築用敷地として売却され、町の経済活動に吸収されるようになった。現在残っている農地も町での需要が多い野菜類の栽培が行なわれている。

村に入ってまず目についたものは各家々の前に色とりどりの美しいガラスの腕輪の束がたくさんつまれており、女子供たちがそれを水で洗っている光景である。私達が入っていくとみな驚いて好奇にたえぬといった様子で大きい目でみつめる。シング君は村人達とはすっかり顔なじみでかれが明るくあいさつをするとみな笑顔を見せる。「村人達はみんなわたくしの親友ですよ。」というかれの態度からは村人達に対する深い愛情があふれている。「日本のサーハブがみんなと話をしにきたんだよ。サーハブはヒンドスタニ語も話すよ。さあ、なんでも話してごらん。」とかれがいうと「アッチャ?(まあ、ほんと)」とぞろぞろよってくる。わたくしがつぎはぎだらけの現地語をあやつりながらのあいさつや雑談を通じてようやく聞き出したことを要約するとつぎの通りである。この家族はもとは農地をもっていたが高利貸しにそ

の農地を債務のかたとしてとられてしまい、今は腕輪作りの請負い業をやっている。つまりこの村で行なう下請け作業は2種類あり、1つはフィロザバードの町から村へ仕事をもらってくる請負人であり、他の1つはこの請負人にやとわれて村の作業場で働く連中である。請負人は作業場をもち、作業に必要な道具を備えていて、これをもたない作業員達に一式1日当たり約12ナヤパイサで貸貸してやる。町の製造業者から腕輪100束(1束は約300個の腕輪からなる)につき17~20ルピーをうけとり、下請け作業員達には100束につき賃金5ルピー、作業灯油代など5ルピーを支払う。

ではこの下請け作業とはいったいどんなものであるかを村の作業場でみてみよう。これは腕輪製造工程ではもっとも簡単な作業で、ガラスの輪の両端を熱して溶接して完全な輪にするだけのことでどんな女子供にもできそうな単純な仕事である。作業場は比較的大きく細長い家屋の中にあり、屋外でまわっている小さい石油エンジンが屋内のふいごの火をおこし、この火でガラス輪の溶接作業が行なわれるのである。暗い作業場には身動きも容易でないほどぎっしりと作業員達が腕輪の山のあいだに坐って働いている。風も入らぬ部屋の中はふいごの火熱でこの寒い冬期でも暑苦しい。炎熱の「死の季節」夏にはどういふことになるのだろうか。かれらはわずかな生活の糧をうるために灼熱の「死の季節」だからといって1日も休息することは許されないのである。それでもこの村の場合は、北インドのハリジャン村としてはまだ恵まれている方なのだ。



暑苦しい仮小屋の作業場でガラスの腕輪を溶接する労働者たち

この村で腕輪作りの下請けなどの非農業職による収入が村の粗生産額にしめる割合は3分の2以上であり、負債額でも農業世帯の方が非農業職をもつ世帯よりも多く、また農業に対する投資や消費の水準においても非農業職をもつ世帯の方が高い。たとえば、住民が「はだし」

でなくなんらかのはきものを足につけていること（これはインドの農村ではまったく異例のケースである）や、ごく少数の世帯ではあるが、時計、家具、陶器（農村の食器類は普通土器か金属製である）、灯油ランプなどをもっていることは、この村がハリジャン部落であるにもかかわらず、付近の町の中小工業の影響により土地の制約の少ない賃金労働職をうることができ、またしたがって貨幣経済がよく浸透して町の腕輪やガラス器具を作る消費型態に融合しつつあることを示していよう。もちろん現在は腕輪作りの職を求めて他の村々から流入する人口が多く、作業内容も単純でだれにでもできることから労働の供給が過剰きみで賃金も企業主よりダンピングされ頭打ちの状態である。しかし、将来はこの腕輪製造業も、より上質のガラス器具製造業として発展する可能性はじゅうぶんにあるので、この町の工業発展の展望はけっして暗くはないようである。

村の晩餐会というもの

村の作業場を1つ1つ視察して宿舎にいったん帰っていると、村で会ったパンチャットの連中2、3人がやってきた。みな、汚れの少ない白いこの地方のインド服とトーピイ（topi 白布製のインドの国民帽）をつけている。おたがいに敬愛の情を表わす合掌の礼をかわすと、「今夜はあなたを夕食に招待したいが、きてくれるか。」と熱心にいう。外国人がインドの農村調査で農民たちと友人になろうとするさい一ばん弱るのはこの「晩餐への招待」であろう。食物の嗜好の相違とか辛い甘いの問題ではなく、もっと深刻な問題、たとえば衛生度の問題などが必ずおこるからである。インド人でも上層カーストの連中はその因習から、身がけがれるとってハリジャンの食物には絶対に手をふれぬ場合が現在でもいくらでもあるのだ。なんとかその正餐の席から逃げようとしてもま



わずかな貧しい食事をとる北インドの農村家族

ず逃げられない。村人たちが幾重にも取り囲んで好意あふれる笑顔でこの遠来の客、サーハブが自分たちの心づくしのカーナー（khana 食物）をすべて口に入れてくれるまでじっと見守り護衛しているからである。常日ごろは信心もしていないありとあらゆる神や仏に念じつつ、泣く思いでやっと食器の底がみえるまで開ったと安心するのもつかのまに、食器はふたたびあつというまにかわりをもらわれてしまう。そして悲劇はふたたびいっそう深刻に繰り返えされることになる。しかしこれは食糧に比較的恵まれている農村だからこそおこりうることなのだ。そして乏しい貴重な食糧をさいてわれわれのためにこうして供してくれるかれらの気持をしるならば、たとえそれがどんな種類のしろものにせよ、かれらが純朴無学であるだけにわきに押しやることはどうしてもできなくなってしまう。イギリス統御時代に農村視察にきたイギリス人たちはその点なかなかたくみだった。村の老人の話や本にかかっているものによれば、かれらは支配者としては厳しく無慈悲であったが、個人としては立派な紳士であり、村の長老やその慣習にじゅうぶんの礼をつくして接したという。そして村人がかれらを襲う場合、かれらイギリスのサーハブは、「じぶんたちは食物をもってきている。それ以外口にできない習慣なのだから。」と礼をもって謝絶し、お互いにそれぞれの食物をとりながら語り合い、村人たちは「えらいイギリスのサーハブ」がじぶんたちの敬愛する長老たちにこのように礼をもってりっぱな態度で接するのを大きな誇りをもって眺めており、やがてサーハブが帰るときには、全村をあげて村はずれまで送っていったものだという。これはアメリカ人が無邪気な好奇心から、また表面的なことをすぐまねてそこになんらかの意義をうちたてるくせのある日本人が、インド服をきてみたり、ごくたまにであっても汚い食物を口にすることこそが現地を解する重要手段であるという悲愴な信念から供されたものを無理にのみこむのとはだいぶん違っている点面白い。

さて今回の夕食への招待もそれじたいはありがたいわくではあるが、村のなまの実状を聞いたり、村人たちの生活内容を知ったり、農村ヒンディ語の練習をするには絶好な機会であり、またなによりもかれらの純朴な好意が嬉しかったのでただちに承諾した。それにハリジャン連中は上層カーストの連中のように菜食主義だとか酒は飲めぬとか（実際には陰で飲んでいても）うるさいことはいわないからつき合いやすい。

その夜、月が出るとわたくしとシング君は街灯1つな

い暗い街道を歩いて村に行った。電灯のない村の中はほとんどまっくらで、たまに灯油ランプが家の中に点存しているだけである。足をちょっとでもすべらしたらまさかさまにおちること請合いの危険な泥の階段を上って名前ばかりの食卓と椅子のある2階間に入ると、パンチャットの連中や他の村人達が10人くらいぞろぞろと現われた。みなハリジャンが一般に用いるトーペイをかぶっている。ナマスター（合掌のあいさつ）がひととおり終わるともう冷えてしまった野菜とじゃがいものカレーのための皿が運ばれる。女たちは時々のおきにくるだけで、すべてひげの男たちの手でサービスがされる。1人が大事そうに安ウスキーが半分入っているびんをとり出すと、わたくしたちも持参のジンを出し、鈍い黄色い灯油ランプの下でまったく異様な酒盛りがはじまった。かれらはわたくしがかれらの慣習になれており、わずかながらもかれらの解ることばを話すので大喜びである。ハリジャンの連中は常に低い声でひかえ目に話す。洋服をきて英語を少々話す町の連中のようにかん高い声をはり上げたり図々しくふるまったりはめつたにしない。有史以前からおしつけられてきたじぶんたちの階級に甘んじて順応しているのか、そのふるまいは無知でありながら謙虚でひかえ目である。かれらがその下請けの仕事をもらってくる町の会社のことになると皆異様に興奮して、「会社はわれわれに正当の賃金を払わない。不当に搾取しているんだ。政府の係官に実状を訴えてもなにもしてくれない。」と口々に論じ出す。やがてわたくしたちはかれらのもとを辞した。長居は朝早くからの労働がひかえているかれらにきのどくである。別れるさいに、パンチャットのボスは「サーハブがわたくしたちといっしょに楽しく交わってくれじつに嬉しい。あなたがいつこの村にこられてもわたくしたちはみな心から歓迎します。そしてあなたがこの村の女性たちに近づかれても、

わたくしたちはそれを最大の好意をもって扱います。」とあって合掌した。これはシング君の解説によると大変な好意であり、望むならわたくしはこの村の娘をめぐり家庭をつくることも「村人との反目なく」できるということらしい。不器用を自認するわたくしに腕輪作りで生計を営むことはできそうもないので、その好意だけをありがたくうけ、わたくしはうやうやしく合掌の礼を返した。ひどく冷える夜だった。

寒波襲来

翌朝、わたくしはひどい頭痛を感じ気分が悪かった。健康なわたくしにはめずらしいことである。条件の悪い農村調査にたえうるには健康と負けじ魂が不可欠である。思いきってとびおき、在日中から欠かさずに実行してきた冷水浴をだんこ実行した。頭から冷水をかぶったとき、水がえらく冷いのを感じた。大気も霧ですっかりかすんでいる。昨夜よりひどく冷えると思ったが、その日の午後はふたたび村にいて調査をつづけ、さらに町の各工場を視察して夕方帰るとひどい発熱をおこし、そのまま1日半ねこんでしまった。発熱で体力が消耗しても、食事は毎回少量のチャパティに汚い野菜といものカレーのため、それに水だけである。味よりも栄養量が絶対にたらないが、町にもこれ以上のものは売っていない。米の多い南インドに比べると北インド農村の食糧事情ははるかに厳しいのだ。この数日間にわたるモハマドプール・ガザマルプール村とフィロザバードでの生活を終えてデリーに戻ったときわたくしは友人たちが驚くほど肉がおちてしまっていた。しかしインドの農村生活をすればこんなことはなにもめずらしいことではない。体力を回復してまた出発すればいいのだ。デリーでひさしぶりに新聞をみると、「数日間にわたり U. P. 州に数十年ぶりの寒波襲来。死者388人。家畜の被害1100頭。野菜類などの被害甚大」とでていた。

飢餓と血と涙で織るカーベット

前述の通り、モハマドプール・ガザマルプール村の場合は一見ひどく貧困にみえても、町の中小工業により賃金労働の暇がえられるために、北インドの下層カーストの村としてはずっと恵まれている方なのである。

しかし農村経済が非農業職である賃金労働に大きく依存している場合にはいつも比較的恵まれていると断定することはあまりにも早急である。たとえば高度の特殊技術を要する手工芸産業でさえも、もし農民が無知無力で（そしていつもこうなのであるが）販売組織や市場の知識をもたぬ場合は、中間搾取がなさけよりしゃなく行な



ハリジャン村の晩餐に招かれて(中央が筆者)

われているのがインドの常である。たとえばカーペット手織業の場合をみてみよう。都市の大商店の店頭や観光客目あての高級みやげ物売場にはいつでも美しいカーリン (kahrihn 高級カーペット) がきらびやかに並んでいよう。ふところに余裕のあるものならだれでも渴望する品物だが値段の方もすばらしくいい。しかしこの美しいカーリンの織目の1つ1つに飢えにあえぎながらこれを織ったやせこけた農村職人たちの悲しい涙と血がなまなましくしみついていることをしるものがはたしてどれだけいるだろうか。ここにそのしられざる悲哀の事例(注4)をみてみよう。

U. P. 州のミルザプール、ヴェラナシ、ジョンプール、アラハバードなどは高級手織りカーペットの産地として有名である。その中の1村——かりにH村としておこり——の32世帯はすべてムガル王朝時代から伝承してきたカーペット織りを生活手段としている。かれらは生まれてからものごころがつくとすぐカーペット織りを習いすぐれた技術をもっているが、教育も資本も販売組織もないかれらはたんにカーペットを織るだけで、外部か会社がかれらに材料やデザインを与えて織らせ、1ヤールくる商人やド四方約3ルピー4アンナで買ったとき、同じものを市場では100ルピーから400ルピーでうり、法外な利潤をあげている。他方、織工たちは夜明けから深夜まで働きづくめで1日9インチくらいしか織れない。1人1日当たりの収入は4アンナから8アンナで1世帯当たりの月額所得は毎日働いても15ルピーから30ルピーにすぎない。それで村の全世帯がかれらの製品を買って商人や会社に負債をおっている。製品に少しでも欠点があると賃金はなさげようしくカットされる。その上、製品が売れぬと、商人はなんのかの口実をつけて賃金不払いやひどい買ったときをやったりする。織工たちが組合をつくって対抗してみても、相手の商人たちは政治家やその縁者などの有力者が多いのであいてにしてみらえずなにもうるところがない。

この村の住民たちは全部おそろしいほど飢えきっているのだ。どんなに激しく1日中働いても胃袋がいっぱいになることなんか絶対にありはしないのだ。村は人がすんでいるという事実がなければ、まるで古代の廃墟とも思えるほど荒れはてている。泥でつくられた家々はみな崩れかけており、ときには家いっぱいひろげてすえつけられている手織機ごとくずれ倒れて死者さえ出す。食事どきにとどの家を訪れてもそのかまどに火が入っていることはめったにない。病気で倒れている子供たちもただそ

のまま家の中どころがさかれていて医者にはかけない。なぜなら医者は金を要求するからだ。この地方の女たちは外では働かず、家にいて家事や食物にする穀類を石うすでひく仕事をしているが、そのうすもたまにしか——織工の夫が食糧をえて帰ったときだけしか——使われないのだ。そして女たちはなにかのはずみにすぐよよと泣きくずれる。夫の留守中に崩れた土間にうつぶして弱々しい声をしばって泣くのである。それがかれらに与えられた宿命とあきらめてはいてもやはりあまりに辛く、あまりに悲しく、あまりにもみじめであるからである。

(注4) この実状はわたくし自身が直接に調査したものではなく、*Blossoms in the Dust* (Kusum Nair, 1961) に書かれていることを、わたくしが Indian Co-operative Union (New Delhi) において聴取確認したこと、*Rehabilitation and Development of Basti District* National Council of Applied Economic Research, New Delhi, 1959) の資料を要約したものである。

おそろべき宿命

飢餓はけっして農村で土地をもたぬ非農業者にかざられるわけではないことは今さらいうまでもない。同じU. P. 州東部のパリア地方の村の例をとってみよう。このハリジャン村では5カ年計画による農村開発計画 (Community Development Projects and National Extension Services) が始まってから数年になるが、村の住民たちは極度の飢餓状態の中におかれている。住民たちは甘蔗汁をのんで飢えをしのぎ、みな悲惨なほどやせ細っている。

その隣りのバスティ地方の土地なしの農業労働者として働くハリジャンたちはあまりにも貧しく飢えているので、家畜の排泄物から集めた穀粒を洗ってそれで飢えをしのぐことがあたりまえのことになっているという。そしてこの実状はもはやどうにも抗しえぬ宿命とあきらめられているのである。もっとひどい事実さえあるがかれら農民のためにこれ以上ふれるにはしのびない。これらの惨状はなにも今だけ生じたことではない。村の老人の言をかりれば、「記憶にあるかぎりの以前から今日までずっと変らぬ状態」なのである。さらにまたこういう事実はなにも2, 3の特例にとどまるわけでは断じてないのだ。これは本質的にはインド農村全体の問題なのである。しかしそれは経済社会的条件をまったく異にする先進諸国一般にはあまりにもしられていないようだ。われわれは紙にかかれた経済計画案をみて安心し、その鉄鋼業を論じ、現在は苦しくても「やがて来るべき take-off の時期」があることを想定して楽観する前に、インド経

済の本体をなすその農村の実状をいま一度よくみつめて考えることは4億4000万のインド国民のためにも必要欠くべからざる人間としての義務ではないだろうか。

活力あふれるパンジャブ州

2月に入り U. P. 州で極度に消耗した体力もほぼ回復したので、さっそくパンジャブ州ルディアナ(Ludhiana)地方のバティアン村(Bhatian)の調査に向った。パンジャブ州はわたくしには U. P. 州とともにひさしくなじみの深い州だが、たしかに他の州とは違い、パンジャビイ(パンジャブ人)が自慢するようにインドの中でもっとも活気のある動態的なところである。肉食主義を排し、肉や乳製品を大量にとるパンジャブ人は体格もインド中で一番大きく、兵隊もこの州出身の者が多い。気候も比較的よく寒い冬をもつ北部パンジャブ出身者は色も白く、女性など白人とあまり変らぬような白い肌をもち、美しい顔立ちをしているものが多い。自然条件に恵まれているうえにパンジャビイはよく働くので、パンジャブ州は発達した農業をもち、1人当たり所得もインドで一ばん高い。色が比較的白くて体が大きく、まず所得水準も高いということはパンジャブ人たちの誇りであるらしい。しかし、他のコミュニティのインド人にいわせるとかれらは一ばん誇大で抜け目ないのだそうだ。たしかにかれらは計算高く猜疑心に強い場合が少なくない。しかしこれもパンジャブ地方がむかしからたえず外敵の侵略をうけてさんざんきたえられてきた歴史的背景を考えれば無理ないのかもしれない。宗教上の戒律から頭髪など休毛を一生刈ることを許されず、長いむさ苦しい頭髪を丸めてターバンでおさえているシーク教徒の姿は一見異様にみえても、それは敵の太刀を頭上にうけた場合には護身用になるわけだ。北インドの娘たちや女子学生が着用しているかわいらしいパンジャブ・スタイルはサルワール(sarwar)という一見ズボンに似た袴を用いるが、それもむかし、いったんことある場合には侵略軍や暴徒の乱暴から身を守るに便利だったからだという解釈もあるように、インドではその宗教上の戒律や慣習がその地方の歴史的背景とくに強く結びついて現在までもかわらずに伝承されていることが多いのである。

ルディアナ市はパーティション(Partisan 回印分離)以後に大きく発展した工業都市でかなり広い。

パンジャブ州、暁の大論戦

汽車で真夜中にルディアナ駅に到着したわたくしは待合室の椅子にゴロ寝をして夜明けをまって、駅から人力車にのってこの町のはずれに下宿してバティアン村の調

査をしているムウルラーシ氏に会いに行く。かれの下宿をようやく探しあて、さて車夫に金をやると、正当以上の料金なのにそれを道にほうり出してこんなはした金はうけとれぬとわめきだす。たちの悪い車夫のよくやる手口である。こちらも深夜駅につき、待合室にごろ寝して夜明けをまっていたせいもあり気が立っているし、第1やった金を地面にほうり投げるとは紳士に対する侮辱である。罰増金を要求するならそれ相応の礼をとれというわけで、今まで習得したヒンドスタニ語のすべてを動員して大論争を展開する。こんなことは1人旅をすれば日に何度も体験することでもなにもめづらしい事件ではない。あいてのシーク教徒の車夫はウルドゥ語なまりが強く、その態度から察するにパーティションでパキスタン領から流れてきた者らしく、「歴史的背景」できたえられているので実にしぶとい。この暁の大論争にムウルラーシ氏たちがぞろぞろ起き出してきたときには2人はまさに武力闘争もやむなきの寸前にあった。事情をきいたムウルラーシ氏がわたくしの味方に加わり、車夫は完璧なヒンディ語を話す新たな強敵をもあいてにして闘い利あらずとみるや、急に口から白い泡をふいてよろめいた。興奮のあまりひきつけでもおこしたらしい。あわてたのはわたくしとムールラーシ氏の方で、車夫を坐わらせるやら井戸水をのませるやらしてなぐさめ、結局、車夫はかれが最初望んだ料金の何倍もの額をもらい、そのうえ、わたくしたち2人のサーハブの見送りといたわりのことばをうけながら元気よく走り去っていったのであった。その後ルディアナにいたあいだ、かれには2度ほど会ったが、わたくしをみるとにやり!と笑って「サーハブ、バイトウ! チャロウ!(だんな、坐んなよ。いこうぜ。)」と車をよせてきたが、そのたびにこちらは「アブ・コウイ・カーム・ナヒン・ハイ!(今のところはいいよ。)」といてあわてて逃げ出したものだ。

空腹をしらぬことの有難さ

バティアン村はルディアナ市から7キロほどのところにあり、おもにパーティション以後に発展した村である。全村92世帯のうち約半分が自作農のジャート(Jat. 北インド農村の上層カーストの1つ)である。村には電気もきており、数年前から少数の自作農により電気灌漑井戸が作られはじめ、かなり効率的経営の農業がみられる。インドの農村としてはまず上出来の方である。わたくしは村の電化がその経済活動に及ぼした効果と土地改革を通じて小作農の地位がどう変わっているかなどを中心に、ムールラーシ氏といっしょに約1週間にわたり同村の調

査を行なった。ルディアナ市の小さいインド式宿屋に陣をとり毎日個人タクシーや人力車とのあいだに必ず起る論争を重ねながらこれを利用しての調査である。宿屋は粗末ながらも比較的清潔な食事を量もじゅうぶんに用意してくれるので、空腹に苦しむことのないまことに恵まれた生活がつづき、おかげで仕事の能率も予想以上に上がった。「空腹に苦しませぬこと」がいかによばらしいことであるかを改めて痛感したしだいである。

農村における所得不平等の拡大傾向

インドの経済発展のかぎは農業の発展であり、インドの農業発展は土地改革の成否いかんにかかっていることはいまさらいうまでもないがこのきわめて明白な事実が立地条件を異にする先進工業圏の人々には必ずしも認識されていないようだ。インドの経済発展の予測や希望はすべて「土地改革が近い将来に完遂されるものとして」という条件下になされているのである。土地改革の目標は、「農業発展の伝統的な阻害条件を除去して農業生産性を高めるために、農業制度内の搾取要因と社会不正を除き、実際の耕作者の安全を保障し、すべての農村人口に平等の地位と機会を与えること」(註5)である。それには不在地主などの中間介在者を除き、公正な小作料をきめて小作権を保障し、小作農に自作農化の機会と権利を与えることが必要条件である。この土地改革が施行されて以来11年たつが、パティアン村の不在地主は若干のかくれた例を除けばたしかになくなっている。つまり「中間介在者の排除」はほぼ実行されたわけである。しかし公正小作料の設定、小作権の安全保障、農村人口に平等な地位と機会を与えるという最も重要な点ではなんら進歩がみられなかった。

この村の地主たちはみな、農耕に有能なジャート層で、活力的なパンジャブ人種である。かれらは土地改革により小作人たちに土地を分配するかわりに、一家をあげて自作農となり、小作人たちをくびにしまった。土地を追われた小作人たちはやむなく農業労働者となって旧地主層にやとわれて働いたり、また事実上は小作農や飼い殺しの作男として働いていても法規上は臨時雇用の農業労働者としてそのうえ以前よりも不安定な状態におかれているのである。したがって現在の小作農の地位は農村の潜在的失業人口の増大により多くの競争者たちを前にしてきわめて不安定であり、小作料も収穫の3分の1以下という州政府規定の公正小作料は有名無実となり、実際の小作料は2分の1以上となっている。小作農たちはくびにされることをおそれて2分の1という園小作料

にあまんじているわけである。その家計をみると、ハリジャンのA小作世帯の場合は家族全員8人(成人4人)で7エーカーを小作し、年所得500ルピーで負債残高500ルピー。同じくハリジャンのB世帯の場合は、家族全員6人(成人4人)で8エーカーを小作し、年所得900ルピー。負債残高200ルピーである。さすがにダイナミックなパンジャブ州だけあって、小作農の負債はいずれも協同信用組合から種子や農具、家畜など生産手段の購入にあてられている点、負債の多くが冠婚葬祭などのため



泥製の家に住むハリジャンの小作農

ある U. P. 州の例とはだいぶ異なっていた。他方、旧地主層である自作農の1例をC世帯でみると、家族全員7人(成人4人)、自作耕地45エーカー。年純所得1000ルピーで負債なく、最近、りっぱなパッカー・ガル(pacca ghar 煉瓦石や石材製の家)を建築し、また1500ルピーを投じて電気灌漑ポンプを設置した。農業労働者は不要時期以外1日平均約20人を使用し、耕作用のトラクターも1台備えている。州政府には名目だけのごくわずかな土地税を収めるだけである。小作農は使っていないという。しかしこの世帯の所得額は明らかに大幅な割引報告がされどいと容易に判断されたし、現にこの自作農の裏手にある小さなカッチャガル(kacha ghar 泥の家)にすんでいる農業労働のD世帯は人員4人で、そのうち2人がC自作農の小作農として働いていることがわかった。この農業労働(かつ、日雇いの小作農)D世帯は年純所得400ルピーでC自作農より約500ルピーの負債を負っており、負債の目的はこの場合、不幸にして冠婚葬祭用であった。察するにこの返済不可能の負債により飼い殺し同然の小作農の地位におちたものと思われた。

旧不在地主は随々とも資本力をもち電気灌漑ポンプやトラクターをもつ富農はますます富農化し、貧農や土地なし農業労働者層との格差がよりいっそう拡大されていく傾向はダイナミックなパンジャブ州もその例外では

ないようである。

しかし村の学童たちは少しも暗いかげがなく、村の中央にある小学校に行っており、わたくしたちが毎日村を訪れるごとに大喜びでとびつき、何度も同じ写真をとってくれとねだるのであった。顔中はこりだらけにしても、パンジャビの少女たちの美しさは子供ながらもはっとさせられるものがあり、その遠い祖先といわれるアーリヤ民族の面影をしのんでロマンチックな感慨にふけったりしたものだった。



立派な家をたてたジャートの富農。かれは活発なシーク教徒で一生毛髪を刈らず日常生活にターバンは欠かせない。

パンジャブ州ではその他多くの興味深い体験を重ねたのち、わたくしはデリーからラジャスタン州 (Rajasthan) を通ってマハラシュトラ州 (Maharashtra) に入り、ボンベイを経て美しい古都プーナに陣をとり、このゴカレ政治経済研究所 (Gokhale Institute of Politics and Economics) の懇切な協力下で、プーナより約70キロはなれたシルール村 (Sirur) と、600キロ余もはなれ、有名なアジャンタ (Ajanta) にごく近いブルダナ地方 (Buldhana) のダード村 (Dhad) とカルディ村 (Kardi) に入って延べ3週間、同州の土地制度と所得分配型態を中心に調査を行なった。その内容は紙面の関係上、残念ながら、また稿を改めて著わすことにして、そのかわりここでは同州の調査に誠心ご協力をご指導をいただいたゴカレ研究所のD・R・ガドギル教授をはじめ有能なスタッフの方々およびインド中央銀行 (Reserve Bank of India, Bombay) とボイベイ大学 (University of Bombay) の関係者の方々に深く謝意を表わし、同時に筆者に同行され、幾多の悪条件にもかかわらず最後まで耐えぬかれた杉谷氏 (アジア経済研究所プーナ派遣員) に心からの賞讃の辞を送りたいと思う。

(注5) *Third Five Year Plan, Gov. of India, 1961, p. 220.* の要旨。

後進国援助とヒューマニズム

インド農村に入って都会にもどり、消耗した体力をいやし、味はどうでも、とにかくじゅうぶんの食物を前にするたびに、わたくしは心から「飢えざること」の幸福をあらためて痛感し、なにものかに感謝の祈りを捧げなくなったものだ。もしわれわれが、さいわいにして (あるいは不幸にして)、インド農村の現状を直接に知る機会をもつことができた場合、衣食住に一応ことかかぬ外国人たちがたとえいかにいわゆる「インド的なる」生活を体験しようとしても、それは結局、特権階級の趣味にすぎぬことを痛感することだろう。そして後進国援助という問題がもはや国際政治政策や経済政策というものを大きくはなれて、ヒューマニズムの精神から生れるべきものであることを、すべての感情が波うつ熱い血潮の激流と固い信念の中に感ずることであろう。

ジャイ・ヒンド!

1962年5月、わたくしは任期を終え、2年余たえまなくつづいてきた農村調査旅行にも終止符をうち、長いあいだ、わたくしの第2の故国ともなっていたインドに別れをつけることになった。出発の日わたくしの乗ったジェット機は、わたくしの断ちきれぬ想いと感情をよそにニューデリーの赤い大地をけて暁の夜空へ深く泳ぎ昇っていった。やがて機体の窓からは北インド大平原が一大パノラマとしてわたくしの眼前に展開されてきたとき、わたくしはひさしく親しんできた北インド農村の人々に心からの熱い別れをつげた。機体は高度を一段と高めながら大きく旋回し、今度はみどりの南インド大平原が果てしなくひろがってみえてきた。「ジャイ・ヒンド! (インドに幸あれ。)」わたくしは南インドの農民たちに別れをつげた。機体はさらに高度を高め、機首を母国日本のある東方に向けた。下界には北インドと南インドすべての大平原が、そして農村がしだいは小さくなっている。あの村にも、この村にも、多くの純朴な友が、たとえ嵐にうたれ、ほこりの中に埋もれようとも、常に鮮やかな色を失わない強い雑草の花のように雄々しく生きぬいているに違いない。そしてまた生きぬいていくに違いない。わたくしをのせた機体はますます青く冷たい大空の中に躍り上がり昇っていく。

「ジャイ・ヒンド!」あのみどりの田園が、赤い大地が、銀色のジャムナ河が、そして広大なインド大陸が、わたくしをあふれる涙の中にとけこみ、うるみ、そしてかすんで消えていった。

(アジア経済研究所長期成長調査室)